8、23　岩村田本町商店街（長野県佐久市）

●取組みまでの経緯・実施背景

岩村田本町商店街は、長野県佐久市（人口約 10 万人、世帯数 35 千世帯）の中仙道沿いに４つある商店街のうち、北端に位置する商店街で長野新幹線佐久駅や上信越自動車道佐久ＩＣに隣接する、交通の要所にある商店街である。

年々公共交通機関が整備されるとともに、周辺地区、郊外での商業集積が始まり、商店街を取り巻く環境も厳しい状況になってきたことから、若手経営者を中心に危機感が高まり、平成 8 年に商店街の組織化、同年 11 月にはアーケードを完成させ、同時に、商店街及び地域の活性化を図り、消費者のニーズを意識した取組みを実施していくこととなった。その後、商店街で徐々に空き店舗が出現し始めたのをきっかけに、空き店舗を活用した意欲ある若手商業者の出店により、商店街に新たな魅力を生み出し、活性化を図ることを目的にチャレンジショップ事業を開始することとなった。

●事業概要（内容）

１．チャレンジショップ「手仕事村」の開設

岩村田本町商店街は、もともと酒、味噌などの商品を手造りする店舗や職人が多く集まっている商店街である。商店街のコンセプト「手造り、手仕事、技の街」「やる気のある若者の登用」という条件に合致した若者 6 名を選出し、平成 16 年 11 月チャレンジショップ「手仕事村」がスタートした。手に職のある、若い経営者が「アクセサリー工房」「ステンドグラス製作」「洋裁仕立て」などを「手仕事村」内で開店した。

出店者の資質向上をはかるために商工会議所の「シニアアドバイザー制度」を活用した経営指導を行う他、商店街が、資金調達、本格的開業、店舗の改装についてアドバイスを行っていることも出店者にとっては大きな支えとなっている。

このように若い世代の出店者が商店街に溶け込み、地域や商店街活性化の一助となっている背景には、商店街の若手後継者が組合役員としてリーダーシップを発揮していること、また、新規出店者とほぼ同世代でコミュニケーションが取りやすいことがある。

２．コミュニティ施設「おいでなん処」の開設

岩村田周辺地区には公民館がなかったため、地域住民とのコミュニケーションの場として、平成 14 年 3 月に長野県と佐久市から補助金を受け、商店街が蔵づくりの空き店舗を活用したコミュニティ施設「おいでなん処」を開設した。地域のサークル活動、イベント、祭事等商店街と地域住民との交流の場としての月間２０～３０回、年間延べ約 6, 000 人が利用している（開設から 1 年間は 3, 500 名の利用）。

３．「おかず市場」の開設

平成 10 年、地区内にあった大型スーパーが移転し、商店街の中に生鮮産品を扱う店舗がなくなり、人通りが減少し、商店街にとって大きなダメージとなった。

このため、「おいでなん処」で開催していた朝市「いわんだ市」での経験、住民からの意見・要望をもとに、大型店とは差別化した惣菜や野菜等の生鮮品を中心とし

た店舗を商店街が経営することとなり、「本町おかず市場」が平成 15 年 4 月にスタートした。組合員が運営を行っている。商品メニューには消費者の声を反映させることを心がけており、現在では、月間約 1,500 名の住民が訪れている。18 年度の売上は前年度比 103%と軌道に乗っており、組合運営の貴重な財源を生み出している。町内会での祭事や老人会等からの注文も入り、地域に無くてはならない惣菜店として、生活者の利便性を高める役目を果たしている。

●実施効果・今後の課題について

チャレンジショップ「手仕事村」の効果として、卒業生がその後商店街の空き店舗に出店する事例がでてきており、商店街に新風を吹き込んでいる。現在、空き店舗は、大家の個人的な事情で貸す対象になっていない店舗（3 店舗）を除けば、皆無の状況にある。

また、「おかず市場」は、商店街における生鮮産品の供給不足を補うだけでなく、お客とのコミュニケーションを図ることで、商店街の核としての役割を果たすようになっている。

人と人とのふれあい、気配り、やさしさを大切にする商店街では、消費者の目線に立った様々な分野での事業を展開しており、今般、未来を担う子供たちの成長を地域ぐるみで支援する「子育て村」をスタートさせた。

●利用した助成金制度など

「チャレンジショップ」平成 16 年県商店街環境整備事業補助金、市商工業振興事業補助金

●商店街の概要・地図

- 岩村田本町商店街振興組合
- 長野県佐久市岩村田 765
  中宿おいでなん処内
- 電話：0267-67-3509
- 商店街のタイプ：地域型商店街
- 店舗数：約 60 店
- http://www.alps.or.jp/iwamurada/

「岩村田本町商店街」

「手仕事村」

「おかず市場」